

- 34 秩録が年にどれほどになるか図り知れぬほどだ。
- 35 担当の役人は付け届けを暦の月日に書き入れをし
- 36 (更に)三・四枚の懐紙に細かに記している。
- 37 受領たちが任満ちて帰京して、付け届けをしていた役人と座席を並べて会う。
- 38 宮中の役所で、付け届けを記した役人と受領とが眼をひそかに見合わせて、目でうなずき合っている。
- 39 役人たちは、いつぞやの東国からの贈り物に対してお返しをしようと思つて
- 40 私利私欲をむさぼることに目がくらんで、国政の根本の決まりを乱してしまう。
- 41 もし上役に物に屈しない度胸があれば
- 42 (その様子に)齒ぎしりせずにおられようか。
- 43 必ずやはつきりと不正を糾弾し
- 44 あの恥知らずどもを屈伏させるに違いない。
- 45 ところが、あろうことか、この盗人どもは、悪事の露見を恐れ、君のような不正を糾弾した主人を逆恨みし
- 46 君を死に到らしめてはじめてそのことの内情が明らかになった。
- 47 君の靈魂は 暗い黄泉路に入ってしまった
- 48 もはや立ち居振る舞いをうかがう手立てもない。
- 49 君の亡骸はすでに灰塵となっていて
- 50 言葉をかけて、我が思いを伝えるあてもないのだ。
- 51 葬られてから百五十日が過ぎ